

2022 年度夏期ワイカト大学英語研修報告

正路 真一・松岡知津子

Report of the Short-term English Program at the University of Waikato

SHOJI Shinichi, MATSUOKA Chizuko

〈Abstract〉

This article reports a Mie University short-term English program at the University of Waikato, New Zealand in summer 2022. This was the first overseas program that Mie University conducted after the spread of Covid-19. This report summarizes how we conducted the program including the measurements against the virus infection. Also, we report the post-program questionnaire, which shows how students reacted to their experiences at the program.

キーワード：海外研修、ニュージーランド、コロナ禍、事後報告書

1. はじめに

2020 年初頭に始まるコロナ禍の拡大以来、本学を含め、多くの日本の大学では、学生の海外研修が中止された。その結果、2019 年に 107,346 名いた日本人の海外留学生数は、2020 年には 1,487 名にまで減少した（日本学生支援機構 2021 a, 2021 b）。その結果、実際の海外留学の代替として発展したのが COIL（Collaborative Online International Learning）をはじめとするオンライン国際交流であるが（正路 2022）、実際に海外で生活することから得られる自信や新たな価値観と同様の効果があるかどうかは定かではない。実際に留学した学生たちの、「慣れない環境で生活したことで、様々な変化に適応するための柔軟性がついた」、「海外で友人を作ることができて自分の価値観が変わった」などといった声に現れる効果（椿 2022）を確実なものとするためには、オンライン国際交流だけでは十全ではない可能性があるため、状況が許す限り留学を実施したいというのは、多くの国際交流に関わる教員の本音ではないだろうか。

本稿で報告する 2022 年度夏期のニュージーランド・ワイカト大学への短期英語研修は、本学国際交流センターが実施するものとしては、コロナ以降初めて行われたものである。本稿では、ニュージーランド・ワイカト大学への短期英語研修の実施について、その準備段階から終了までの行程を記し、また終了後の学生たちの感想を報告する。

2. 実施

ワイカト大学英語研修は、2018 年度以前は、同じ三重県の皇学館大学が主体となって実施していたものに、三重大学の学生も参加させてもらうという形で実施されていたが、今年度以降は三重大学が単独で実施するものとして計画された。本学が初めて単独で行うワイカト大学研修を実施するにあたり、本年度はその研修時期を夏休み中の 9 月 3 日から 24 日までの 3 週間と設定し、9 月の実施に向けて、5 月に募集を開始することとなった。まず、5 月 12 日にオンライン説明会を実施したのであるが、その段階では主に新型コロナウイルスによる入国制限の調査に多くの時間が割かれ、説明会当日も、その制限に関する説明に約半分の時間を要した。具体的には、ニュージーランド入国の条件として、コロナワクチンを 2 回以上接種していることを前提とし、日本出国 24~48 時間前以降に抗原検査または PCR 検査等で陰性判定を受けた上で、その陰性証明書をオンライン旅行申告書 (NZTD) にアップロードする必要があるとされていた。さらにニュージーランド入国時に 1 回目の抗原検査、入国 5~6 日後に 2 回目の抗原検査、そしてニュージーランド出国 (日本帰国) 72 時間前以内に 3 回目の抗原検査を受ける義務があるということであった。説明会の後、1 か月ほどの募集期間を挟んで、6 月 24 日の締め切りまでに予想を上回る 21 名の学生が応募した。

幸い、コロナに係る制限は、7 月?9 月に徐々に緩和されていった。日本出国前の陰性証

三重大学国際交流センター主催 2022年度：
三重大学から助成金有！

ワイカト大学 (ニュージーランド) 夏期語学研修

※新型コロナウイルス感染症の状況により、中止になる可能性があります。

渡航日程 3週間：2022年9月3日 (土) ~9月24日 (土)

受講コース 一般英語 (General English) コース

宿泊方法 ホームステイ (3食付き) ※日本人1人1家庭

研修費用 約32万円 ※変動の可能性有。 ※航空券他別途、約25万円必要。

申込締切 学内締切6月24日 (金)
※ワイカト大学締切7月1日 (金) ※最少催行人数5名

現地受入校 ニュージーランド北島・ハミルトン市
ワイカト大学バスウェイカレッジ

☆説明会開催☆
5月12日 (木) 12:10~12:50
参加申し込みはこちらから→

プログラムの魅力

Point-1. 安全で平和な国
ニュージーランドは「世界平和指数」で常に上位にランクイン！世界でも安全な国の一つです。日本とは時差が定ですが、時差が1時間と比較的少ないので、体調管理がしやすいです。

Point-2. 安心のホームステイ
ホストファミリーは信頼できるワイカト大学の登録ファミリー！朝・昼・晩の食事を提供してくれるだけでなく、ニュージーランドの生活に早くなじめるように、様々な面で手助けしてくれます。

Point-3. 日本人スタッフが駐在
親身になって留学生の相談にのってくれます！

※参加費用に含まれるもの

- ワイカト大学での授業料、入学登録料、ワイカト大学学生証、成績表
- オークランド空港からハミルトンのホームステイ先までの送迎 (往復)
- ホームステイ中の朝・昼・夕食の3食 (但し、ホストファミリー宅から往復のランチセットは含まれません。朝食のみの場合は自己負担。)
- 留学生保険費用 (加入は必須)
- ホームステイ登録料
- ホームステイ費用3週
- 応出国前検査費用

※参加費用に含まれないもの

- 日本からオークランド空港までの往復航空運賃及びそれに伴う雑費用
- ホームステイ先から学校への通学費用 (バス代)
- 任意に加入していただく海外旅行傷害保険 (キャンパスリミックの保険費用は含まれています。)
- 12月1日申請用 (2019.10月より電子渡航証の取得と観光税の支払いが必要となりました。)
- 自由参加の観光、アクティビティ
- 電話代、追加の飲食等個人的な雑費用

週23時間	月	火	水	木	金
午前	9:00~12:00	GEコース			
	12:00~13:00	昼休み			
午後	13:00~15:00	GEコース		Free	

問合せ先：国際交流チーム 担当：竹内 (kokusai@ab.mie-u.ac.jp / 059-231-9804)

図 1 2022 年度ワイカト大学夏期語学研修 チラシ

明書のアップロードは必要なくなり、またニュージーランド出国（日本帰国）72時間前以内の抗原検査も、3回以上のワクチンを接種している学生は必要がなくなった。

6月に参加が確定した21名の学生は7月1日を期限としてワイカト大学様式の参加申込書を提出し、7月末までにオンライン英語レベル判定試験（現地でのクラス分けを目的としたもの）を各自受験した。そして、7月と8月に各1回ずつ行われたオリエンテーションに出席し、その他細々とした手続き（ビザの取得、海外旅行傷害保険の加入など）を経て、9月3日に日本を出国した。この間、本研修の担当教員である筆者らと担当職員は全ての参加学生とSNSでグループを作成し連絡が取れるようにしていたが、約半数の学生から7月から9月かけて計数十回に渡る問い合わせを受けた。参加学生の中には初めて海外に出るといふ学生も多く、問い合わせの内容は諸手続きの方法から現地での生活まで多岐に渡った。こうした問い合わせは全て、次回以降の研修説明会等において参加学生に提供したい。

準備期間を通じて大きな助けとなったのは、ワイカト大学日本事務所の存在である。神戸に所在する日本事務所は、時差を気にすることなく日本人スタッフに電話やメールで質問をすることができ、また返信も早く、本学担当者としては手続きを円滑に進める上で大変ありがたい存在であった。ワイカト大学日本事務所のスタッフは7月に行われた1回目のオリエンテーションの際には本学に来てくださり、学生たちに対面で説明していただいた。また、9月に学生がオークランド空港に到着した際、現地でお出迎えくださり、ワイカト大学まで案内して下さった。さらに、第1週目の研修は、学生たちと一緒に現地に滞在してさまざまなサポートをしていただくこととなった。

話は前後するが、8月に本学で行われた2回目のオリエンテーションには、航空券の手配を依頼した旅行会社のスタッフが出席し、渡航の際の注意事項等を説明していただいた。このスタッフの説明によると、今年度海外研修を再開した日本の大学は複数あり、当該旅行会社が担当した6大学の海外研修のうち、4つの研修でコロナ感染者が発生したとのことであった。これに対し、本学のこのワイカト大学研修で、一人の感染者も出ず最後まで無事に研修を終えられたのは幸運であったと言えよう。

渡航にあたっては筆者の一人が引率教員として同行することとなった。これは、本学にとってこれが初めてのワイカト大学研修であり、現地の学習環境や治安といった環境および雰囲気、そして学生の反応を直に見てくることで、今後の本研修の可能性について検討するという目的もあった。渡航計画としては、9月3日の朝、参加者全員が三重大学に集合し、その後バスに乗って伊丹空港に移動し、飛行機で成田を経由した後、9月4日午前中にニュージーランドに到着するというものであった。渡航に際して直面したトラブルと

しては、まず、出発当日の朝、前日の大雨によって電車の運行が遅れ、予定時間に大学に到着できない学生が現れた。しかし、電車を途中で乗り換えることにより、最小限の遅れで済んだため、想定時間内に伊丹空港に到着することができた。また、もう一つのトラブルとしては、成田空港で個別に機械で搭乗券を発券する際になってはじめて、一人の学生が誤ってトランジットビザ（経由目的でのみニュージーランド入国を許されるもので、空港の外に出られない）を取得していたことが明らかになった。これは、航空会社職員の指示により、その場で正しい入国許可証を再度オンライン申請することで搭乗可能となり、予定通り他の学生とともに 9 月 4 日に現地に到着することができた。

9 月 5 日に初日を迎えたワイカト大学研修であったが、研修の第 1 週目は引率教員が学生たちとともに現地に滞在した。第 1 週目の最後に引率教員が帰国した日は、偶然、同じワイカト大学に短期研修をしていた日本の他大学の学生たちが帰国する日と同じであった。他大学の大学生たちは、空港で重量制限超過の荷物の処理に右往左往しており、その処理手続きは非常に手間のかかるものだった。このような状況を前もって知ることにより、後日、本学の研修参加学生が帰国する前に荷物の重量について準備することができたのは、本学にとって幸運であった。

9 月 4 日から 24 日までの研修中は、筆者らや担当職員も加わっている SNS グループに、学生たちから現地の楽しそうな写真が次々と投稿された。また帰国に係る注意事項等についても密に連絡を取りあい、9 月 25 日に全員が無事帰国することができた。

3. 事後報告書に見られる学生の感想

本章では、参加学生 21 名からの報告書の内容を記す。報告書は、主に以下の①～⑤の項目について、自由記述形式で回答してもらった。

- ①留学前の準備について（応募動機、申込手続き、語学対策など）
- ②研修内容や大学（授業内容、形態、学生どうしの交流、アクティビティ等）
- ③生活（住環境、食生活や健康管理、危機管理、持参して良かったもの）
 - a. ホストファミリーについて
 - b. 食事、健康管理
 - c. 持参して良かったもの
 - d. 危機管理（危険な目に遭わないために気をつけていたこと、危険を感じたことなど）
 - e. 研修費用および金銭管理について
- ④思い出になったエピソードを自由にお書きください。

⑤次回の参加者へ向けてのメッセージをお願いします。

上の設問に対する全ての学生の回答は、三重大学国際交流センターのホームページ上に掲載されている (<https://www.mie-u.ac.jp/international/abroad/overseas/>)。学生の回答を概観すると、ほとんどの学生が丁寧に記述して回答していることが分かる。特に、③a「ホストファミリーについて」と④「思い出になったエピソード」の項目が、学生の記述量が比較的多いという印象を受ける。以下の節では、①～⑤の各設問に分けて学生の回答を報告する。

3.1 学生の回答：①留学前の準備について（応募動機、申込手続き、語学対策など）

本節では、学生たちの本研修への応募動機、手続きにかかる感想、現地で英語を使って生活するにあたっての対策等に関する回答を報告する。なお、各問につき、一人の学生が複数の回答を記述した場合や、何も記述しなかった学生があるため、下に記す回答者数は本研修の参加者数と一致しない。

本研修に応募した学生たちの応募動機は、海外体験をしたかったためというものが最も多く（6名）、次いで英語力向上を目指してというものが多かった（5名）。その他、海外の文化を学びたかったというもの（3名）、留学してみたかったというもの（3名）、自分の英語がどの程度通じるか確認したかったというもの（2名）があった。

また、研修参加に係る手続きについての記述は少なかったが、手続きがかなり多く、面倒であったとする回答が4名あった。これに付随して、時間的な余裕を持って準備する必要があったと記述した回答者が1名いた。

研修前の各自の語学対策としては、何もしなかったと答えた学生が5名いたが、その他の学生はさまざまな方法で対策を試みていたようである。例えば、「文法や語彙の勉強をした」、「英会話教室に通った」、「ラジオ英会話を聞いた」、「YouTube で英語を勉強した」、「英語で映画を見た」、「BBC ニュースを英語で見た」、「本学の外国人留学生と英語で話した」、「ニュージーランドのスラングを予習した」などである。また、食事の注文などの日常会話フレーズを勉強しておけばよかった、自己紹介で話す内容を考えておけばよかったなどの反省も見られた。

3.2 学生の回答：②研修内容や大学（授業内容、形態、学生どうしの交流、アクティビティ等）

現地での授業内容は、主に午前中は文法等を学ぶ座学、そして午後はアクティビティを

中心とした参加型の授業であったようである。特に学生の記述が多かったのは、こうした参加型のアクティビティが多かったこと (ゲームや教室外でのインタビューなど)、そしてペアワーク、グループワークが多かったことについてである。また、毎週木曜日の放課後に行われた、ワイカト大学の学生との交流会 (English Club) が好評だったようで、こちらを記述した学生も多かった。こうした環境をまとめて、スピーキングの機会が多かったと回答した学生も複数いた。一方、多くの学生にとっては文法の授業は簡単であったようであり、また受講生が日本人ばかりであったのでどうしても日本語を話してしまうことがあったとする回答も見られた。

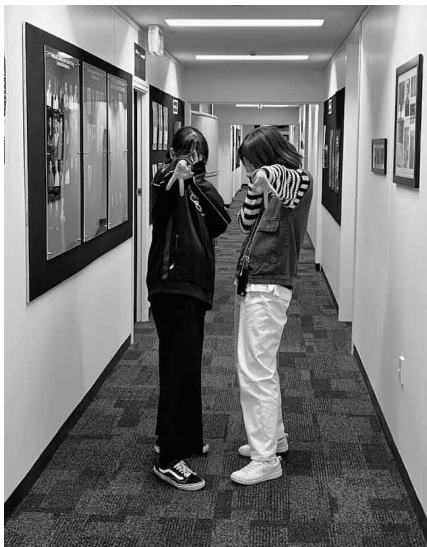


図 2 ワイカト大学内



図 3 キンキタンガ Day (マオリ族の日)

3.3 学生の回答：③生活 (住環境、食生活や健康管理、危機管理、持参して良かったもの)

生活について設問は、「a. ホストファミリーについて」、「b. 食事、健康管理」、「c. 持参して良かったもの」、「d. 危機管理 (危険な目に遭わないために気をつけていたこと、危険を感じたことなど)」、「e. 研修費用及び金銭管理について」の五つの項目に分けて回答してもらった。回答量が多く、また回答内容が多岐にわたるため、本稿でその全てを報告することはできないが、まず「a. ホストファミリー」については「優しくかった」、「近隣施設 (動物園や植物園など) に連れて行ってもらった」という回答が特に多かった。中には、日本に帰国してからも SNS でホストファミリーと繋がっているというほど良好な関係を築いた学生もいる。その一方、ホストファミリーに関するネガティブな意見も散見

され、例えば「優しくない」、「用意してくれる弁当がお菓子だけ」、「平日はなかなか話をする時間がない」、「洗濯する回数が少ない（2週間に1回など）」といった意見が挙げられた。特に、洗濯する回数が少ないという意見は複数の学生から寄せられ、彼、彼女らの悩みの種であったようである。

次に、「b. 食事や健康管理」については、まず現地の9月の気温が予想以上に低かったという学生が多く、体調を崩す学生も複数いたようである。その他は食事に関する意見が多く、「美味しい」、「じゃがいもが多い」、「フルーツが多い」、「外食の値段が高い」などの意見があがった。

「c. 持参して良かったもの」については、回答が非常に多岐に渡るが、比較的多かった回答はクレジットカードであった。多くの西欧諸国と同じく、ニュージーランドはカード社会であるため、クレジットカード払いが便利な場面が多かったようである。（ただしJTBのカードは使えない場合が多い。）その他には、前述の通り気候が寒かったため、防寒着（ウルトラライトダウン、ヒートテック、マフラー等）を持って行って良かった、または持っていけばよかったとする意見が多かった。これに関連して風邪薬などの常備薬、鼻炎薬が役に立ったという学生も複数いた。また、これも前述の通り、洗濯の回数が少ないホストファミリーが多かったため、自室で服を乾かすためのハンガー、選択できない場合に使う除菌スプレーを持って行って良かったとする回答もあった（ただし、ニュージーランドの冬は雨季でカビが生えやすいため、自室で服を乾かすことを禁ずるホストファミリーもあったとのことである）。その他、前述の通り現地が雨季であったため、雨よけとしての帽子、ウインドブレーカー、折りたたみ傘、そして靴が濡れた時のための替えの靴が重宝され、一方、晴れの日には日差しが強いので日除けとしての帽子、日焼け止めクリーム、サングラスなどが重宝されたようである。また、ホストファミリー宅での生活に関しては、家の中でスリッパを履く習慣があるようで、室内用のクロックスやスリッパが便利であったという学生も複数いる。さらに、ホストファミリーへのお土産（日本のお菓子、ボールペン、扇子）などが喜ばれたという回答、また治安対策として貴重品を入れて身につけられるような小さい鞆（ポーチ、ショルダーバッグ）が便利であったとする学生も複数いた。

「d. 危機管理（危険な目に遭わないために気をつけていたこと、危険を感じたことなど）」について、学生たちは、貴重品はリュックやポケットに入れず、ポシェットやショルダーバッグに入れて肌身離さず持ち、ウォレットチェーンを使うなどしていたと回答した。特に現金は必要最小限しか持たず、また小分けにして保管し、そしてパスポートは常にスーツケースに入れて鍵をかけて保管していた学生が多いようである。外出時はこまめ

にホストファミリーに行き先を伝え、あらかじめ危険な地域を聞いておいてそこには近づかないようにし、一人で外出せずに常に複数人で行動するなどの工夫をし、また夕方 6 時以降は外出を控えていたとのことである。時にバスの中は治安が悪いので気を付けたと回答した学生が複数いた。実際に危険な目に会いかけた学生もあり、ホームレスのような風態の現地に現金を持っているかと聞かれた学生もいれば、街中で中指を立てられた学生もいた。

「e. 研修費用および金銭管理について」については、航空運賃が約 19 万円、研修費用が約 32 万円、海外旅行保険が約 2 万円であるのはもちろん全員共通しているが、食費やお土産代を含む交遊費は、各人にやや差が見られた。学生の回答の中で、最も多い額が約 12 万円、最も少ない額が約 2 万円であったが、その他の多くの学生は約 6 万円程度と回答している。

3.4 学生の回答：④思い出になったエピソードを自由にお書きください

この設問についての学生たちの回答は様々であり、各自がそれぞれにとって心に残る思い出があったことが窺える。ここでは特に回答数が多かったものを記す。まず、日常生活の中での思い出として、ホストファミリーとの交流を挙げた学生が 6 名いた。一緒におしゃべりをしたり、一緒に料理をしたり、ホストファミリー宅のたくさんのペットと戯れたり、週末にハイキングや農場に連れて行ってもらったりしたことが最も心に残っているという回答であった。また、友人と一緒にキャンパスや街を散策したことを挙げた学生も多い。キャンパス内のカフェでコーヒーを飲んだり、キャンパス近くのアイスクリームショップで休憩したりした時間が楽しかったとのことである。



図 4 ニュージーランドのアイスクリーム



図 5 ニュージーランドの食事

日常を離れた体験として多く回答に挙げたのは、ラグビー観戦、ホビット村ツアー、ロトルアツアーである。ホビット村とは、映画撮影のために作られた小人の集落のセットである。ホビット村へのツアーは、本研修の参加者が、日本出国前に相談して参加を決めたアクティビティであり、本学の研修参加者 21 名全員が揃って参加した。



図6 ホビット村1



図7 ホビット村2

ロトルアは、ニュージーランドでは有名な観光地であり、マオリ文化の体験や羊との交流など様々な活動を体験できたようである。またラグビーは、ニュージーランドの国民的スポーツであり、こちらもニュージーランド文化を体験する良い機会であった。ロトルア観光ツアーや、ラグビー観戦は、学生たちが現地で情報を入手して、希望者が自主的に参加したものであった。ラグビー選手と一緒に写真を撮ったり、ツアー先で羊に餌をあげたりなどは、日本ではなかなか体験し難いと推測される。



図8 ロトルア観光



図9 ラグビー観戦

ロトルア観光ツアーやラグビー観戦以外にも、ワイカト大学近くの動物園へのツアーなど、学生は積極的に現地で情報を集め、様々なアクティビティに参加していたようで、こうした学生たちの自主性、積極性は、彼、彼女らの海外体験をより充実させたと思われる。

3. 5 学生の回答：⑤次回の参加者へ向けてのメッセージをお願いします

この設問の回答也多岐に渡るが、本研修の参加学生が次回の参加者に伝えたいこととしては、(i) 英語学習について、(ii) 異文化体験について、(iii) ニュージーランドでの生活について、(iv) その他の四つに大別できる。英語学習については、「英語に触れるいい機会となった」、「自分の英語が伝わるのが嬉しかった」、「英語を話すことへの抵抗がなくなった」、「リスニング力が向上した」、「英語の学習意欲が増した」などという肯定的な意見が多かったほか (6 名)、「参加学生が日本人ばかりだったため、望むほどの英語力の向上は期待できない」とする意見も 1 名から挙げられた。

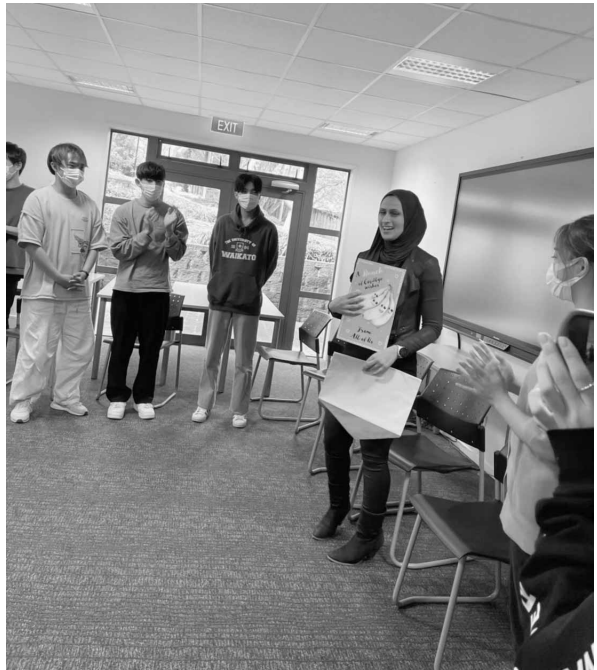


図 10 研修最終日の授業

異文化体験については、「海外文化体験のいい機会となった」、「ニュージーランドの文化が学べた」、「日本の大学にはあまりない授業が受けられる」、「逆に日本のありがたみに気づく」、「日本に帰りたくなくなる」、「他の留学にも行きたくなるな」どの意見が挙げられた (13 名)。

ニュージーランドでの生活についての回答は、「素敵な国」、「治安がいい」、「自然が美しい」、「観光が楽しい」、「ニュージーランド人はおおらかでフレンドリー」、「ホストファミリーとの交流が楽しい」、「日常生活が楽しい (スーパーで買い物をしたり、変わった形の信号機を見たりなど)」といった意見が挙げられた (13 名)。

その他、「この研修は楽しい」、「参加学生どうし仲良くなれる」といった意見、そして「クレジットカードを持っていくことが必須」、「ワイカト大学には日本人スタッフがあるので安心」といったような、現実的なアドバイスも寄せられた。こうしたアドバイスを含

め、この設問に寄せられた学生たちの回答は、次回のワイカト大学語学研修への参加を検討している本学の学生たちにとって、その参加をおおいに促されるような内容であったと考えられる。

4. 結語

本稿は、三重大学の海外研修プログラムとしては、コロナ禍が始まって以来初めて実施した研修を報告したものである。未だコロナ感染が収束しない中実施されたものであったので、参加学生の募集にあたっては応募数の予想がつかず、最小催行人数の5名も集まるかどうか危惧していたが、期待を大きく上回る21名の参加となった。これは、行動制限を余儀なくされていた学生たちの留学意欲がいかに高かったかを示唆するものであると考えられる。他大学の報告では「無理をしてでも留学したい」という学生の声も聞かれる一方、長く続くコロナ禍を経て海外への意欲が削がれていく可能性があるとも指摘されている(坂上・瀬尾 2021)。留学に対する本学の学生たちの意欲を萎えさせることなく、また結果的に一人の感染者も出さずに海外研修プログラムを完遂できたのは、非常に幸運であり、ほとんどの学生たちが楽しく研修に参加できたことを担当教員として嬉しく思う。

海外留学は大学生活の中で得られる国際経験の最たるものの一つであると考えられる。2020年以来、その機会を多くの学生たちから奪った新型コロナウイルスは、現在までになんかなり弱毒化し、感染症の重篤性も低下してきたように思われる。今後の感染状況について決して楽観視はできないものの、大学生が国際経験の機会を奪われるのは非常に大きな損失であるため、本学としては、最大限の注意を払いながら更なる海外研修の実施を進めていくべきであると考えられる。

謝 辞

2022 年度夏期ワイカト大学研修の実施にあたって、手続きを手配していただき、またたくさんの質問にお答えくださったワイカト大学日本事務所佐原有香様、現地で本学学生たちの相談に親身に対応してくださったワイカト大学留学生コーディネーター岸葉子様、研修実施に当たってすべての行程に適切に対応してくださった本学国際交流センター職員竹内麻依様に、心より感謝申し上げます。

参考文献

坂上伸生・瀬尾匡輝(2021)「茨城大学農学部における新型コロナウイルス感染症拡大による 国際プログラム参加意識の変化」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』5, pp. 107-117.

正路真一 (2022) 「日米大学生による英語と日本語の Virtual Exchange 型会話練習」『三重大学国際交流センター紀要』17, pp. 69-80.

椿健太郎 (2021) 「日本経済大学と海外教育機関との交換留学プログラムに関する現状分析と展望」『日本経大論集』50 (2), pp. 81-91.

日本学生支援機構 (2021 a) 「2019 (令和元) 年度日本人学生留学状況調査結果」https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2021/03/date2019n.pdf

日本学生支援機構 (2021 b) 「2020 (令和 2) 年度日本人学生留学状況調査結果」https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2021/04/date2020z.pdf